

実践のプロファイリング手法による 景観デザイナーの調整役としての機能分析

坂本 真理子¹・山中 英生²・真田 純子³

¹正会員 (有)環境とまちづくり

(〒771-4502 徳島県勝浦郡上勝町福原川北30番地) mariko-s@beetle.ocn.ne.jp

²正会員 工博 徳島大学大学院 ソシオテクノサイエンス研究部 教授

(〒770-8506 徳島市南常三島2丁目1番地) yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp

³正会員 博士(工学) 徳島大学大学院 ソシオテクノサイエンス研究部 助教

(〒770-8506 徳島市南常三島2丁目1番地) sanajun@ce.tokushima-u.ac.jp

本研究は景観デザイナーがまちづくりに関わる際の調整役としての機能について、実践のプロファイリング手法により要素を抽出し考察を行った。調整役としての機能は、合意形成の知見に基づき「対話の促進」「討論の司会」「交渉の調整」「合意の実行」の枠組みについて整理したところ、すべての枠組みに当てはまるプロファイルが存在し、景観デザイナーの調整役としての機能が存在すること、さらに、それらを支える信念が存在することを明らかにした。

キーワード: 実践のプロファイリング, 景観デザイナー, 調整役, まちづくり

1. はじめに

地域の課題解決や活性化などを目指し、多彩な主体による活動・施策・政策を進めるまちづくりにおいては、様々な主体による協働が必要不可欠となっており、その関与者の意向を調整して協働の具体化を進める調整役が重要とされる。景観デザインの世界でも、多様な主体の関わりによって空間の質や、利用価値を高める試みが多く事例で見られる。このため、景観デザイナーにも、多様な主体の調整役としての機能が必要となると考えられる。

本研究では、こうした認識をもとに、景観デザイナーが果たすべき、調整役の機能を明らかにすることを目的とした。

2. 本研究の特徴とアプローチ

本研究では、実践のプロファイリング手法を用いて、景観デザイナーがまちづくりに関わる際の多様な調整の場面から、調整役としての要素を抽出し、その機能について分析した。

実践のプロファイリング手法¹⁾はForester²⁾によって提案された手法で、課題解決に当たった実践者による行

動を聴取し、多様なアクターが関わる調整課程の中での、価値観、行動形式、調整力の鍵などの要素を分析する方法である。Forester²⁾はプロファイリング手法をcriticalでnaturalisticとしている。言説分析ではあるが、緊張感のある場面に着目するためcriticalであり、理論を先に置かず対象者自身の判断を捕捉する点でnaturalであるとしており、この手法では、当人が困難を感じた取り組みについて、本人の言葉によるストーリーを記述する。このとき、当事者の経験を抽象化した概念や感想を聞きだすのではなく、実際に個別の現場で起きた出来事をありのままに聞き出すことを重視する。あくまで「起きた出来事」をプロファイルとして整理するが、発言に含まれる感情表現や、緊張感のあった場面での状況のストーリーを重視する特徴がある。

我が国では「オーラルヒストリー」と呼ばれる手法が都市計画分野でも後藤ら³⁾によって適用されており、プロファイリング手法もこの手法に類似していると言える。山口ら⁴⁾によると、強いて整理すれば、プロファイリング手法は歴史よりも実務への理解を深めることに目的があり、事実関係よりも個人によるストーリーの描出に着目し、対象者による解釈を極力排除する、点で異なるアプローチとしている。

プロファイルの聴取対象者には、都市設計の専門家である小野寺康氏に選定した。小野寺氏は小野寺康都市設

計事務所を設立し、景観デザイン専門家として各地のまちづくりに関わっている。小野寺氏は土木学会のデザイン賞を多数獲得する一方で、「形」にこだわらない空間のコンセプト、それが社会に働きかける「意味」を重要視しており、プロセスにおいて地域と協働したデザイン活動を行っている。

本研究では、小野寺氏に対して実践のプロファイリング手法の趣旨を説明し、「仕事の経験のなかで、最も調整が難しかったものの、最終的には結論へと導けたと思われる、政策や事業の企画検討や実施の事例」の提案を依頼した。この依頼に対して氏が示した二つの事例について、プロフィールの聴取と分析を行った。

一つは福井県勝山市の中心市街地において大清水と呼ばれる湧水の水辺を整備した事例である。小野寺氏は市からの委託で住民参加から詳細デザインまでを担当し、地域でワークショップを実施し、地域素材を活用したデザインを提案し、実現している。しかし、事業費の不足で整備区間を絞らざるを得なかったことや、事業に対しても地域の評価を得ることができなかった（と本人が述べている）事例である。

二つ目は宮城県日向市駅前の連続立体高架事業の一環における駅前広場の事例である。小野寺氏は、委員会やワーキング会議、ワークショップを繰り返し、駅前広場の設計を担当した。氏にとってフリーハンドに近い形でデザインが実現したものであったという。日向市駅（駅前広場を含む）は2009年のBCS賞、駅周辺のまちづくりに対しては2011年の都市景観大賞を受賞するなど、多くの賞を受賞するなど、全国的に著名な事例となっている。

3. 実践のプロファイリング手法による調整役としての要素抽出および機能分析

(1) 分析の対象

本研究の対象とする、二つの事例の主な内容を比較して表-1に示す。

表-1 事例比較

項目	勝山市大清水空間	日向市駅前広場
位置付け	勝山市より発注	日向市より発注
竣工年度	2005年	2006～2008
事業費	少ない	適切
住民参加	あり	あり
地域からの受け入れ	弱い	強い
デザインの質（自己評価）	良い	良い
受賞	なし	あり

(2) プロファイリング手法および機能分析の枠組み

プロフィールの制作手順については、コーネル大学の講義で用いられるガイドラインを参考にした。ガイドラインに基づく3つのステップとして「準備段階」[聞き取り調査]「書き起こしと編集」の手続きが挙げられている。「準備段階」では、第一に、調査を行う者自身が興味を持っている関心事を明確にすることからはじまる。何のためのプロフィールを制作したいのかを明確にする必要がある。「聞き取り調査」では、対象者に連絡し、聞き取り調査への協力を依頼する。調査の前に同意書（consent form）を対象者に送付し、内容を確認してもらう。実際の聞き取り調査は、主に、簡単な経歴、事例、省察について行う。個別の質問への回答を引き出すのではなく、対象者のストーリーを引き出すよう、適宜、質問を差し挟む。聞き取り調査では、「なぜ（why?）」ではなく、「どのように（how?）」という質問をすることが推奨されている。「書き起こしと編集」では、聞き取り調査の結果をそのまま文字起こしする。書き起こしについては、読みやすさ等を考慮し、段落の順序を入れ替える、調査者の質問を削除するなどの編集を加える。ただし、調査者の判断で、対象者の言葉を追記することは許されないとガイドラインでは示している。

調整役の機能として、Jhon ForesterはDealing with Differences⁹⁾において、「対話の促進」「討論の司会」「交渉の調整」という3つの役割を導出している。また、コンセンサス・ビルディング⁹⁾の5つのステップとして「招集、役割と責任の分担、集団問題解決のファシリテーション、合意の達成、合意の実行」を挙げている。本研究では調整役の機能として、上記の指摘から「対話の促進」「討論の司会」「交渉の調整」「合意の実行」の4つにわけて、それぞれの機能としての氏の行為を聴取したプロフィールから抽出した。

以下では、行為が見られた場面を説明し、氏が語った内容を段落ちで記載して、そこからの気づきを記載している。

(3) プロファイルの抽出と分析

a) 対話の促進

勝山市の事例では、市主体の中心市街地活性化事業に対して、設計者として依頼され、関わる。

勝山市なりに、この路線、ここは広場化したい、緑地化したいみたいなポイントがもうすでにあって、彼らなりに予算立てして、それで、設計者として呼ばれたんです。

つまり、市は方針を固めていて、設計だけをする役目と認識していた。これに対して、氏は市民との対話を開始する。

基本的には、デザイン案を作って。デザイン案をスケッチ、模型作って。それで意見を吸い上げて、どんどん目の

前を変えてくつという形で。短期決戦ですから、そんなやり方が一番よかったですよ。

提案をして、一緒に、先進地見に行こうとあって。その（ワークショップ参加者である）おじいちゃんたちと一緒に小布施に見に行ったりとかですね。

住民参加でワークショップの中で、氏はデザイン案や模型を提示している。さらに、参加者と一緒に先進地見学を行いながら、市、市民、デザイナーの思いが対話となる場づくりをしていることがわかる。

日向市駅の事例では、宮崎県主体の連続立体鉄道高架事業の中で、日向市主体の駅前広場と周辺の区画整理事業の設計者として依頼され、関わりを始める。駅前広場の設計は急にトップスピードで進められた。

（駅前広場は頼むと言われていたものの、なかなか始まらなかったが）駅前広場の設計は、もうすぐやってもらわなきゃいけないと。一体設計料いくらなんだって急に振られて。ドタバタで動き始めた感じですね。

設計者で一番困るのは、途中段階っていうのは大体うまくいってないので出たくないんですよ。決まってから出したんですけど、会議が多いとそうもいかなくて。そうすると中途半端なもので、自分的には恥ずかしい絵にならざるをえないんですけど。それでも出す。出すといろんな人がいろんなこと言うてくる。のみ込みつつ部分的に無視しつつ・・・。

日向市駅の事例では、広場についての素案が行政側にもないまま、依頼が始まっている。そして、氏は自分が出す中途半端な案が、むしろ対話を促進することになると、デザイナーの役目を認識している。

b) 討論の司会

次に「討論の司会」にあたるプロフィールを抽出した。勝山市の事例では、素材検討の場面において以下のように語っている。

それで、地域素材を使おうということになってですね。ただ勝山で、地場素材ってあんまりなくて。それで、近隣の武生で、福井県ですけど。越前瓦作ってる。それで、見に行った。・・・最終的にそれをメインにして。瓦と玉石という素材を中心に、デザインを組み立てて、地域性出そう。そんな感じで提案して。

ワークショップで地域素材を決定するまでのプロセスを運営し、デザイナーとしては、それを具体化することの役目を担っている。

日向市駅の事例ではワークショップでの出来事について以下のように語っている。

途中段階のまずどんな広場にしようかっていうワークショップも散々やったんですけど、形がある程度整って姿が見えてきた段階でも、まだ意見はもちろん出してもらってもいいけど、今度はどう使いますかっていうそういう

ワークショップにだんだん切り替わっていった。

市民意見では、細かな形を作ることにはだわらないように、むしろ使い方を考えることへと意識を向けている。

ひょっとこ祭りが日向の最大のイベントで、今までずっとそれは市役所の前に芝生の広場でやってた。彼らは芝生の上でイベントやるのは慣れてたんですね。実際日向はやたらと暑くてやたらと雨が降るんですよ。よく考えたら芝生っていうのは完全な舗装材ですよ。

日向の人たちの気質はとにかく優しいんですよ。いろんな人たちの話を彼らも細かく聞く。だから会議の数が半端じゃなくて、これは一つの文化だな。そういう風土的な優しさみたいなものが形に表われたほうがいいって思って。

氏は日向の地域の情報収集を行い、風土を理解し、デザインを検討している。

c) 交渉の調整

小野寺氏の「交渉の調整」として、デザインの調整にあたるプロフィールを抽出した。

勝山の事例では、整備路線の変更等が議会で問題になり、苦情を受ける場面があった。その場面を以下のように語っている。

最終的には路線を絞ることで単価を上げて。何とか越前瓦を使えるようにしたんですね。そうすると、整備ができない所が出てくるわけです。整備ができない所はなんでできないんだという話が、議会で問題になり。別に悪いこと、何もしてないんでね。淡々とまあ、丁寧に説明は繰り返して、こういう理由ですって言うんだけど。

氏は苦情に対して説明を繰り返した。設計者としての説明することが責任だと認識していると言える。

彼らが想定していた単価で淡々とまとめて整備すれば、多分、地元的にはもめなくて終わったんですよ。ただ、何も生まなかったらと思う。

僕は余計なお世話したのかもしれない。僕はやっぱり、このレベルまでいきたいっていう、自分で決めてる水準があつて。自分はプロとして、ここまで持って行かなければならないっていう。一つの、自分自身の基準なんですね。それを下げることは僕自身ができないので。だからこうなるのが必然だったといえれば必然だったかもしれませんね。

地域の想定する整備イメージと、小野寺氏の意識の違いに気付く、悩みながらも、自らの質の高い空間を作ることを優先したことが分かる。

日向の事例では、設計期日が迫る中、最終委員会で合意がひっくり返る場面があった。

基本設計をまとめて実設計にいかなきゃいけないんですけど、基本設計にいくまでが相当時間かかり、もうまとまなきゃいけない時期に、最後にまたひっくり返ったんですよ。まだちょっと違うっていうことで。それが最終委員会だったんですけど、最終委員会で「すいません。これだ

とまとまらないですね」って。「そうなるかなっていう感じも持ってたんですよ」と言ったら、担当者が「しょうがありませんよね」と言って、「よろしく頼みます」っていう。設計期限の延長は何とかするから、工期はデッドラインがあるので、そこまでには何とかしてくれと。で、追い込まれた最後の最後で、（案が）出てきたんです。

プロジェクトとして時間制約のある中での、関係者との調整において、最後まであきらめず合意案となるデザインを作成する態度が見受けられた。

d) 合意の実行

デザインの調整の結果、設計案がまとまると、小野寺氏の業務としての役割は終了することになるが、小野寺氏のプロファイルからはそれ以上の関わりが見られた。

勝山市の事例では、業務とは別に、疎水を活用したまちづくりを提案した。

もともと、市内にせせらぎ疎水が流れていた町なのね。車社会になって全部埋めちゃったんですよ。でも、一部水は流れてるんで、ふたを外して、玉石をつんで、疎水に作り直せば、越前大野みたいな形の街角に、疎水が流れてる風景が再現できる。「それ、やりましょうよ」って。一部、建物の地際を流れてた所があって、そこは開けても大丈夫だろうと提案してですね。詳細な模型まで作って。

勝山市の疎水を活用したまちづくりの可能性について専門家の視点からの指摘であり、価値発信である。

日向市の事例では、業務とは別に、地元の高校生相手のワークショップを運営し、ベンチづくりを実現した。

僕はその後で、今度は地元の高校生相手にワークショップをやって、駅前広場に置ける居心地のいいベンチを作ってみようっていうデザインをやったら、いろんな案が出てきて、そのうちの一つが女の子チームがデザインしたやつなんですけど、カーブした木造のフレームで囲われたパゴラみたいなベンチがあって、結構面白かったんで、それをきちんと僕がなぞってハードラインにして、作りやすいように図面化して、大工さんに作ってもらって。

駅前広場が地域から愛されるようになるための働き掛けであり、小野寺氏はできたものに対する信頼を高める作業をしていることが分かる。

勝山の事例では、現場施工者とのやりとりの場面において以下のように語っている。

せせらぎ沿いの所に、木を植えて、植栽松のところに、こういう石をこんな感じで置いてくれて。図面には書いてあるんだけど。現場に行ってみると、ほぼそれに、イメージに近い石が入ってたんですよ。「いいね」とかって話になって。「いいすか」とかって工事業者さんが言って。「この石、どこから持って来た？」。「うーん」と笑ってますよ。「買ったでしょ？」。「いや、私の家の土間から掘って持って来ました」。彼は整備終わった後に子ども

をここへ連れてきて、「この石、見覚えあるだろう。うちの土間にあった石だ」。「これはな、うちの石だったけど、...これから町の石になった」って。威張っていうか、なんかこう、自慢したらしいですね。

氏は整備の現場にも足を運んでおり、設計したものに対する責任感の強さとこだわりを持っている。また、現場施工者とのやりとりから、現場に対する愛情が感じられた。

(2) 調整役としての機能分析

小野寺氏のプロファイルから抽出した、調整役としての要素を表-2に整理する。

「対話の促進」としては、どちらの事例においてもワークショップや会議へ参加し、その場でのデザイン案や模型の提示による対話の場づくりをしていたことが分かった。

「討論の司会」としては、勝山の事例からワークショップにおける素材決定のプロセスの運営、デザイナーとして案を具体化したこと、ワークショップにおける市民意識への働きかけをしていたことが分かった。また、デザインの具体化の前段として、事前の地域情報収集、風土理解をしていたことが分かった。

「交渉の調整」としては、勝山の事例における、苦情に対する説明責任を果たしたこと、期日を確認しながら合意案となるデザインをあきらめなかったこと、ふたつの事例に共通して、質の高い空間をつくる使命感が見受けられた。

「合意の実行」としては、勝山の事例からは、業務と

表-2 小野寺氏の調整役としての機能

区分	勝山の事例	日向の事例
対話の促進	・ワークショップにおいてデザイン案や模型の提示 ・先進地見学 ・対話の場づくり	・会議でのデザイン案の提示 ・ワークショップへ専門家として関与
討論の司会	・素材決定のプロセス運営 ・デザイン案の具体化	・市民意見への働き掛け ・地域の情報収集と風土の理解によるデザインの具体化
交渉の調整	・苦情に対する説明責任の認識 ・地域の想定する整備イメージの読み取り ・質のよい空間への使命感	・期日を確認しながら合意案となるデザインをあきらめない態度 ・質のよい空間への使命感
合意の実行	・業務とは別のまちづくりの可能性提案、価値発信 ・現場管理	・できたものに対する地域信頼構築作業 ・現場管理

は別のまちづくりの可能性提案と価値発信を行っていた

こと、日向の事例からは、できたものに対する地域の信頼構築のための働き掛けをしていたことが分かった。ふたつの事例に共通して、現場管理への意識の高さがうかがえた。

以上のことから、小野寺氏は調整役としての機能を果たしていたことが分かった。

(3) 調整役としての機能を支える信念

小野寺氏の調整役としての機能を支える信念をプロフィールから抽出した。

勝山の事例では以下のように語っている。

僕は、ハードウェアの専門家なので、結果はハードウェアなしじゃ残せないという認識があるので。ワークショップがいくら円滑にいっても、最後、ハードウェアのクオリティが悪ければ意味がないと思ってます。できたものの空間的な質が大事だから。自分で客観的に評価すると、一定レベル以上にいった僕は思います。僕は責任は果たして自分には言えるかな。

それを町の人に、きちんと受け取ってもらえるような所に残念ながら、いかなかったんだよね。

結果となるハードウェアへの責任感、質の高い空間をつくることへの使命感が見受けられた。

日向の事例では以下のように語っている。

自分が設計家として一生涯でやる仕事の中で一度でもこういう仕事でできた、こういう仕事をある仲間と一緒に参加できたし、成功させることができた。途中しんどいこともいっぱいあるんですけど、でも楽しくてやりがいがあって、そんなプロジェクトに参加できたっていうのは、設計家冥利に尽きるものですよ。こっちもそう思ってるし、向こうも完全に任せてくれるわけですよ。

関係者と信頼関係を構築しながら、地域に愛される広場をデザインできたことに対する達成感が見受けられた。

ふたつの事例に共通して、小野寺氏は設計家として質の高い空間を作り出すことに対する使命感と責任感を持っていること、空間が地域に愛されるべきであるとする信念が見受けられた。

3. おわりに

本研究では、実践のプロファイリング手法を用いて、景観デザイナーがまちづくりに関わる際の調整役としての要素を抽出し、その内容から、景観デザイナーを調整役としてみた場合の機能と景観デザイナーとしての教訓について考察した。

プロファイリング聴取対象者には、景観デザインの専門家である小野寺康氏に選定した。プロフィールの聴取

を氏が示した二つの事例について行った。プロフィール分析では「対話の促進」「討論の司会」「交渉の調整」「合意の実行」の4つの枠組みについてプロフィールを抽出し、考察を行ったところ、すべての枠組みにあてはまるプロフィールが存在した。小野寺氏の調整役としての機能として、「対話の促進」では、多様な主体の思いがデザインになるような対話の場づくりの機能、「討論の司会」では、デザインを具体化するための、事前の地域情報収集や風土理解と、素材決定のプロセス運営、デザインから利活用への方向性のかじ取りの機能、「交渉の調整」では、苦情に対する説明責任の認識、期日を確認しながら合意案となるデザインをあきらめない態度、地域の想定するイメージの読み取り、質のよい空間づくりへのこだわり、「合意の実行」では、まちづくりの可能性提案と価値発信、できたものに対する地域の信頼構築、現場管理の機能が挙げられた。さらに、これらの調整役としての機能を支える信念として、二つの事例に共通して、小野寺氏の設計家として、成果となるハードウェアへの責任感、質の高い空間を作ることへの使命感、空間が地域に愛されるべきであるとする信念が見受けられた。これらの信念は、景観デザイナーが様々な主体と協働してまちづくりを実現させるための教訓であると言えた。

なお、本研究では、他の分野での調整役の機能を担っている専門家や市民活動家のプロフィールを聴取しており、上記の成果をもとにして、多様な立場で成立している調整役について、その機能と役割を把握するとともに、専門家や市民活動家の調整能力を支える信念のありかたについて、その共通点を探りたいと考えている。これらの成果をさらには、政策・事業推進における調整役の養成、教育方法への活用に生かすことを目指している。

謝辞：本研究の資料調査において小野寺康氏には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表する。

本研究は科学研究費基盤研究B(24330037)「実践のプロファイリング手法を用いた政策形成過程における調整役機能の研究」(研究代表者：東京大学 松浦正浩)の一環として、研究分担者の山中の指導のもと、坂本がヒアリングと分析を行ったものである。

参考文献

- 1) 山口行一, 松浦正浩, 山中英生, 坂本真理子: 合意形成の調整役機能を明らかにする実践のプロファイリング手法の検討, 土木計画学研究・講演集, No. 47, CD-ROM, 2013
- 2) 宮田隆弘, 山中英生: 実践プロフィール分析による住民行政協働型コミュニティ計画の成果と課題, 計画行政学会, 37, 2014

- 3) John F.Forester : The Deliberative Practitioner, The MIT Press, 1999
- 4) Forester, J., Susskind, L., Umemoto, K., Matsuura, M., Paba, G., Perrone, C. and Mantysalo, R. : 「Learning from Practice in the Face of Conflict and Integrating Technical Expertise with Participatory Planning」 , Planning Theory and Practice, No.12(2),pp. 287-310. , 2011
- 5) 後藤春彦, 佐久間康富, 田口太郎 : まちづくりオーラル・ヒストリー, 水曜社, 2005
- 6) Forester, J. : Dealing with Differences, New York: Oxford Univ. Press, 2009.
- 7) ローレンス・E・サスカインド, ジェフリー・L・クルックシャンク, 城山秀明, 松浦正浩 : コンセンサスビルディング入門, pp. 27-28, 有斐閣, 2008